

# あじさい



第 103 号

2020 年 3 月  
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>

# カムチャツカ半島西岸の重要湿地とミヤコドリの標識



Dmitry Dorofeev

ロシア天然資源環境省 全ロシア環境保護研究所 上級研究員  
ドミトリー・ドロフィーエフ Dmitry Dorofeev Дмитрий Дорощеев

## はじめに

オホーツク海北方のシギ・チドリの中継地はこれまでほとんど研究されていなかった。カムチャツカ半島西岸に沿ってのデータを集め、これら中継地を調べることができればいくつかの重要な中継地を明らかにすることができるであろう。これまでに、4つの中継地が知られている。ソボレヴォ町近く<の海岸線>、モロシエチナヤ川河口 (Gerasimov & Gerasimov 2000)、ハイリユーソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口 (Dorofeev & Kazansky 2013)、それにペンジナ・タロフカ両川河口 (Gerasimov 2005) である<5 ページの地図参照>。

## 河口での調査

我々はハイリユーソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口のシギ・チドリ中継地の調査を2015年から始めた。この調査は2010年から2012年まで行ったシロイルカの調査時のデータに基づいていた (Dorofeev & Kazansky 2013)。シロイルカの調査時

に、我々はこの中継地のシギ・チドリの種類や個体数を記録しただけであった。しかし、後にこれまでの文献を見てみると、ここはオホーツク海地方での最大の中継地のひとつで、カムチャツカ西岸で最大のものであることがわかった。

ハイリユーソヴァ川の右岸にはウスチ・ハイリユーソヴァ開拓集落があり、<ペトロパブロフスク・カムチャツキーの>エリゾヴォ空港から飛行機あるいはヘリコプターの便がある。この両川河口では干満の差が激しく、5.5 m ないし 6 m にもなり、これによって広大な干潟ができ、多くの種類のシギ・チドリが南へ渡る際に採餌する。この中継地は6月末から10月始めまで使われる。これまでの最大個体数は28,000羽であり、実に32種を数えた。この中にはSurfbird (*Calidris virgata*)<南北アメリカに生息するシギ=キョウジョシギの近縁種>のユーラシア大陸での初記録もあった (Wader Study, 論文印刷中)。個体数が最も多くなるのは7月初旬であった。

## 目次

カムチャツカ半島西岸の重要湿地と ミヤコドリの標識	2
表紙の言葉	2
鈴鹿の野鳥たちその後	7
ホームページで記録データの閲覧が できるようになりました	8
過去の探鳥会データから分かること	8
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	10
— 連載第19回 キリアイ、ヘラシギ —	
新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、 探鳥会中止のお知らせ	14
事務局だより	14
海辺の町のツバメたち	15
野鳥記録 (2019年10月～2020年01月)	16
理事会報告	20
探鳥会報告 (2019年10月～2020年1月)	20
編集後記	24

## 表紙の言葉

### コムクドリ

名張市 田中 豊成

名張でのコムクドリの飛来は、ほぼ毎年若葉が芽吹き始める4月上旬から下旬に見られることが多いです。10羽以下の小群で、休息や栄養補充を兼ねて約3・4日程度滞在してから、北の地方へ移動するようです。雄の頭部や胸は、淡いクリーム色で頬には赤褐色の斑が印象的で、なんだかホッとした親しみを感じます。

秋の南下時期には、見過ごしているのでしょうか、名張で見かけたことは記憶にありません。他の夏鳥と同様に、春や秋の移動をくりかすことは大変でしょう。この春も、コムクドリの群れを見られることを、楽しみにしています。

最も個体数の多いのはオバシギ (*Calidris tenuirostris*)、オオソリハシシギ (*Limosa lapponica*)、オグロシギ (*Limosa limosa*)、ハマシギ (*Calidris alpina*)、トウネン (*Calidris ruficollis*) であった。また、ここハイリュソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口はロシアのレッドデータブックに記載されているハウロクシギ (*Numenius madagascariensis*)、ミヤコドリ (*Haematopus ostralegus*)、ヘラシギ (*Calidris pygmaea*) が訪れる重要な場所である。



ハイリュソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口上空のシギ・チドリ大群

### 標識調査

2016年から我々は標識調査を始めた。最初はオバシギの捕獲を試みた。しかし、カスミ網ではオバシギを捕まえることは不可能なことがわかった。そこで、我々は特殊なトラップを作った。これは無双網を改良したものである (Dorofeev et al. 2019)。この改良無双網を使って合計 948 羽のオバシギ、コオバシギを標識することができた。我々の調査地では黒と黄色のフラッグを左のスネに付けた。黒は無地で、黄色は番号を刻印したフラッグとした。オバシギについては 2016 年と 2017 年に日本から 4 例の観察が報告された。

### ミヤコドリの繁殖と標識

我々が調査地に到着し、キャンプサイトを作ると、そこでは毎年、2,3 つがいのミヤコドリが警戒していた。2016年にはキャンプサイトから 800 メートルほど離れた、小石の砂州に巣を見つけた。7月14日、巣には3個の卵があった。同じ日に成鳥の半分くらいの大きさのヒナも見つけた。これは非常に遅い繁殖例で、多分2回目の産卵であろう。残念ながら、数日後、この巣はクロトウゾクカモメの餌食になってしまった。



改良無双網によるオバシギの捕獲



河口のオバシギの群、黄色のフラッグがみえる

毎夏、ミヤコドリの個体数をしらべたが、最大でも10-15羽であった。キャンプの近くには3ないし5つがいの巣があった。親鳥がしきりに警戒するが、ヒナを見ることはできなかった。この鳥は非常に注意深く、遠く離れていても警戒する。2019年にはイギリスからボランティアの協力員、エドワード・スタビングス (Edward Stubbings) 氏が来訪し、大きな若鳥の捕獲法を教えてくれた。遂に2019年7月15日、2巣で3羽のヒナを捕獲した。我々は数字を刻印したハウロクシギ用フラッグを持っていた。BTOの標識指針ではこの大きさのものがミヤコドリに使えるとされている。このヒナはかなり大きく、標準の金属リングと黒、黄色のフラッグを付けた。これは極東ロシアでミヤコドリにフラッグを付けた初めての例になった。



フラッグの装着作業

その後の野外調査中に、我々はこのフラッグのついた鳥を何回か見た。ヒナの1羽T4はいなくなってしまった。多分この鳥はクロトウゾクカモメ、アカギツネ、あるいはカモメ類に捕食されたのであろう。しかし、残りの2羽、T6とT7についてはその後大きくなり飛べるようになったのを見た。最後にこの2羽を見たのは2019年8月5日であり、十分に成長し、飛べるようになっていた。そして、我々も8月15日に野外調査を終え、この地を離れた。

ハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ川河口は面積約50平方キロメートルと広大で、かつ餌となる無脊椎動物が豊富な泥質干潟であり、渡ってくるシギ・チドリ類にとって非常に重要な場所である。オバシギとオグロシギは多く、それらは小さな二枚貝 (*Macoma balthica*) <バルトハマグリあるいはその近縁種> を食べている。この二枚貝はまた、ミヤコドリの主な餌となっている。我々もミヤコドリが干潟でこの二枚貝を捕まえているのを見ている。



ベロゴロヴァヤ川河口・ミヤコドリの繁殖地

我々が見たつがいのすべてはベロゴロヴァヤ川河口左岸と Ambon 岬との間の海岸線で生息していた。この場所は人里から離れ、地元の人たちも河口のこの部分には行かないので、ミヤコドリが繁殖できる。ウスチ・ハイリュースヴァ町近くの海岸線でも繁殖に適しているようだが、ここには砂浜となり町まで自動車道路がある。また、たくさんの野犬がいて、ヒナを捕食するので、ミヤコドリにとって繁殖できる場所ではない。

2019年には初めてのヒナを7月7日に見た。また飛べるようになった幼鳥は7月31日に見ているので、この年の繁殖は平年並みであったと思われる。



ミヤコドリの幼鳥

## 日本からの知らせ

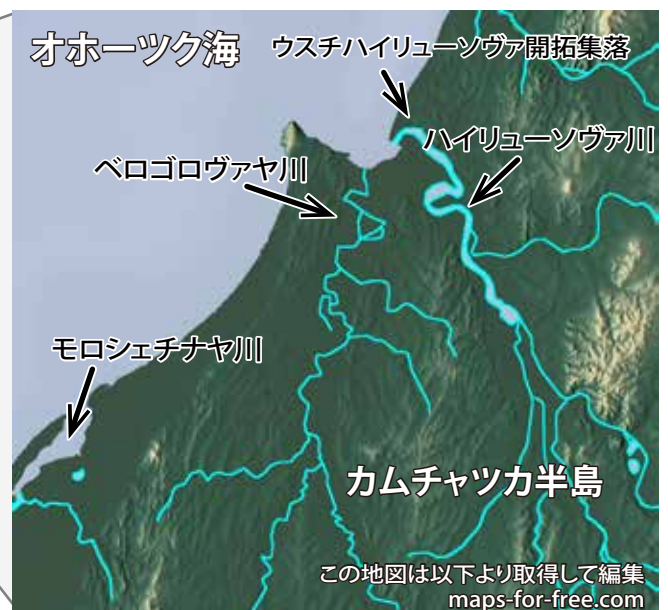
我々は東アジアーオーストラリア飛行ルートのどこかで我々がフラッグを付けた鳥が見つかってくれればと願った。しかし、我々はたった3羽だけにフラッグを付けたので、その可能性は極めて低いと思った。なので、我々の若いミヤコドリのうち2羽が秋に日本で見つかったとの知らせを聞いて、たいそう感動した。見つけてくれた人、その情報を我々に伝えてくれた人々に深く感謝する。カムチャツカからのミヤコドリが日本で越冬すると証明した初めての事例である。我々はミヤコドリの越冬地がより南であると考えているので、日本で秋にこのように多くの観察事例が出るとは思っていませんでした。



フラッグを装着したミヤコドリ幼鳥 (T7)

2019/7/15

三重県五主河岸で見つかった  
ミヤコドリ YouTube 動画  
フラッグ (T7) 付き ミヤコドリ



ハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口の南約 40 km にカムチャツカ西岸では有名な中継地モロシェチナヤ川河口がある<上記の地図参照>。文献に記載されたデータでは最も重要な中継地の一つであるとされている (Gerasimov & Gerasimov 2000, Schuckard et al. 2006)。しかし、この河口はハイリュースヴァ川よりも狭く (14 平方キロメートル)、重要性は低いように思われた (Dorofeev & Kazansky 2013)。しかし、2011 年に我々はそこで 200 羽ものミヤコドリの大群を見ている。そのほとんどが、繁殖に加わっていない鳥であった。2018 年には 50 羽ほ

どしか見られなかったが、繁殖つがい数つがい見られた。なぜ、繁殖に加わっていないミヤコドリがモロシェチナヤ河口を好んでハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口に来ないのか、我々には解決

表 フラッグの付いたミヤコドリの目撃情報

個体	日付	目撃地	撮影者	情報源
T6	2019年 9月 25日	千葉県三番瀬干潟	田久保 晴孝	環境省発表
	2019年 10月 27日	同上		環境省発表
	2019年 10月 30日	同上		環境省発表
	2019年 11月 13日	同上	伊東 紘	環境省発表
	2020年 2月 2日	同上	田久保 晴孝	日本野鳥の会東京
T7	2019年 9月 27日	三重県安濃川河口	Katsuta K.	環境省発表
	2019年 9月 28日	三重県雲出川河口		環境省発表
	2019年 10月 1日	三重県五主海岸	笹間 俊秋	日本野鳥の会三重
	2019年 10月 16日	三重県雲出川河口	片山 賢一	環境省発表
	2019年 11月 16日	三重県高松海岸	鈴木 健真	日本野鳥の会三重

QRコード



河口調査地のキャンプサイト

のできない疑問である。

著者は標識されたミヤコドリを観察してくれた人に感謝する。我々は黒と黄色のフラッグをオバシギ、コオバシギ、オオソリハシシギ、オグロシギ、ハマシギ、メダイチドリに付けている。2020年我々はカムチャツカ半島西岸で最大のシギ・チドリ類中継地で野外調査を続ける計画をしている。もちろん、ミヤコドリにもフラッグを付けようと思っている。来秋の日本からの便りを期待しながら。

(次号へ続く) (訳 平井正志)

### 訳者あとがき

ミヤコドリにフラッグを付けたロシアのドロフィーエフ氏と連絡が取れ、興味深いレポートを送っていただき、訳した。読みやすいように意識した部分もあった。豊富な内容で、写真も多いため、一部を次号に送り、掲載する。原文はホー



繁殖地を飛翔するミヤコドリ

ムページ (<https://miebird.org/index.php/ja/16-announce/753-oystercatcher-flag2019> 「フラッグ付きのミヤコドリはカムチャツカから」) に掲載する予定であるので、興味ある方はお読みください。なお文中の <> 内は訳者のコメント。著者と連絡を取るについて山階鳥類研究所、千田万里子氏に協力していただいた。ここに謝意を表す。

### (参考文献)

Dorofeev, D., A. Matsyna, A. Ivanov & E. Khudyakova. 2019. A modified pull-net for catching Great Knot at roost sites. *Wader Study* 126: 154–156.

Dorofeev, D.S. & F.V. Kazansky. 2013. Post-breeding stopover sites of waders in the estuaries of the Khairusovo, Belogolovaya and Moroshechnaya western Kamchatka Peninsula, Russia, 2010–2012. *Wader Study Group Bulletin* 120: 119–123.

Gerasimov, Y. 2005. The Penzhina River estuary, Kamchatka, Russia—a very important shorebird site during southward migration. *Status and conservation of shorebirds in the East Asian-Australasian Flyway. Wetlands International Global Series* 18: 161–167.

Gerasimov, Y. & N. Gerasimov. 2000. The importance of the Moroshechnaya river estuary as a staging site for shorebirds. *Stilt* 36: 20–25.

Schuckard, R., F. Huettmann, K. Gosbell, J. Geale, S. Kendall, Y. Gerasimov, E. Matsina & W. Geeves. 2006. Shorebird and gull census at Moroshechnaya estuary, Kamchatka, far east Russia, during August 2004. *Stilt*: 34.



## 鈴鹿の野鳥たちその後

四日市市 辻秀之

2020年の正月休み、伊勢のKさんに山仲間と一緒に中勢の河口や海岸を案内頂いた時、「最近昔より良くなった場所ってある?」とお尋ねすると、即答で「ない!」とのこと。河口や海岸の場合、護岸改修や河道内の伐採、浚渫、養鰻池の浮きソーラーなど、目に見える急な変化があって、これでは良くなる要素がないのも頷けます。

さて、山の鳥はどうでしょう。2014年12月の「しろちどり」に、シカの食害と観察機会の減った野鳥について書かせて頂きましたが、林床の笹藪に依存するコルリやコマドリは、前回の投稿以降、鈴鹿では一度も観察していません。減ったというか、もはやいなくなったという印象です。



コルリ 撮影：小坂里香

ウグイスはいなくなったところもありますが、比較的被害の少ない低標高域を中心に持ちこたえている様です。もうひとつ笹藪メンバーの外来種ソウシチョウは、2018年の夏に武平峠、2019年の夏に釈迦ヶ岳で観察。時期的にどちらも繁殖の可能性がありますが。また、2019年3月に藤原岳自然科学館の矢崎氏らによつていなべ市大安町宇賀の宇賀川右岸で5～10羽程度の小群が観察されていて、こちらはしぶとく定着しているようです。



宇賀川のソウシチョウ 撮影：藤原岳自然科学館 矢崎 允彦

一方で昔からあまり変わらない山の筆頭は野登山。ここは元より森林性の野鳥が多く、カラ類やミソサザイ、イカル、アカゲラ、オオアカゲラなどの留鳥、夏鳥ではオオルリ、キビタキ、そして何より頂上付近のクロツグミ個体群は今も健在で、春から初夏に美しいさえずりを聞かせてくれます。



野登山のクロツグミ巣立ち雛

今年の冬は度の過ぎる暖冬で、鈴鹿もとうとう根雪になりませんでした(1/31現在)。滋賀県側の雨乞岳や清水の頭など、まだ立派なササ草原が広がりますが、今年はササが一冬雪に埋まることなく、お隣のイブネ、クラシのササはすっかりシカに食い尽くされているので心配です。



2020年冬 鎌ヶ岳鎌尾根

雪のない冬山は寒いだけで楽しみがないので、この冬はほとんど鈴鹿に出かけませんでした。早春の花の季節になったらまた出かけようと思っていますが、楽しみでもあり、なにやら恐ろしくもあります。



## ホームページで記録データの閲覧ができるようになりました

四日市市 (ホームページ担当) 三曾田 明

野鳥の会三重には、過去から現在に至る各種の野鳥記録がありますが、残念ながらこれまででは活用されてきませんでした。そこで、みなさんにも活用していただけるよう、日本野鳥の会三重のホームページ(以下、「HP」と表記)で、日本野鳥の会三重の記録データを閲覧できるようにしました。

まだデータはHP用に作成中ですが、現状では以下の3種のデータが閲覧できます。

### 野鳥記録報告データ

野鳥の会三重の会報誌「しろちどり」の「野鳥記録」に掲載された鳥の記録です。まだ一部のデータのみですが、今後、「しろちどり」に掲載された全データも見れるようにします。

### 探鳥会記録データ

過去の探鳥会のデータ。各探鳥会でどんな鳥が見られるか、過去と現在の移り変わりを調べることができます。このデータは津市の内藤 喜彦さんに入力していただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

掲載号	観察日	探鳥会名(観察地)	種	数
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	トバト	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	ハシボソガラス	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	ハシボソガラス	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	ムクドリ	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	カワラヒフ	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	セッカ	
1	1993-04-25	木曽岬干拓地探鳥会	ツグミ	

### 全国鳥類繁殖分布調査 投稿データ

2016年から行われている全国鳥類繁殖分布調査で、三重の会員の方から寄せられた情報が見られます。

なお、HP上で表示されるデータは項目を限定しています。もし、研究(このしるちどりに記事を書いてみようと思われる方も含む)のために未公開部の項目が必要な場合や、CSV形式のデータが必要な場合は、HPの『「日本野鳥の会三重」に対する総合的な問合せ』よりお問い合わせください。

ここに紹介したデータをHPで閲覧するには、HPでログインしてユーザーメニューで[記録データ]をクリックしてください。

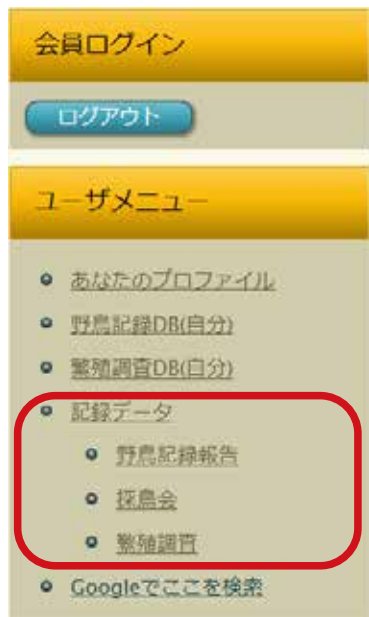
### お試しログイン

野鳥の会三重の会員の方で、まだユーザー登録されていない方でも、この記事をご覧になった方が見られるようにゲストユーザーを作成しました。以下のデータでログインをお試しください。

なお、このアカウントの有効期間は、2020年3月15日～2020年4月30日までとします。

ユーザー名：g2020

パスワード：miebird



## 過去の探鳥会データから分かること

津市 内藤 喜彦

今回、日本野鳥の会三重のホームページから、探鳥会記録データが検索・ダウンロード出来るようになりました。「しろちどり」に載っている探鳥会報告の全データ(101号まで)を取り出すことが出来るようになったのですが、さて、「探鳥会データ」を使うと聞いてイメージ出来ますでしょうか？

入会2年目の私にとって、「過去の探鳥会データ」が手に入ることは、力強いことの上なしです。では、どう役立つのか、いくつかの例でご紹介します。

**【用途1】**：今度の探鳥会、どんな鳥が見られるの？  
参加予定の探鳥会、その探鳥会名を入力して検索



すると、過去観察された鳥の種類を知ることが出来ます！

⇒初心者にはありがたいデータです。参加に当たって見られる可能性がある鳥を、前もって図鑑で予習できます。何回も参加され、知り尽くしたベテランの方も、その探鳥会で会える鳥を再認識するツールとして利用できるのではないのでしょうか！

**【用途2】：会ってみたい鳥はどの探鳥会に行けば見られるの？**

自分が好きな鳥、ごひいきにしている鳥、ぜひ探鳥会でお目にかかりたいものです。その場合、種に鳥の名前を入力して検索すると、過去観察された探鳥会を知ることが出来ます！

⇒初心者にはもってこいの機能です。好きな鳥に会いに、県内各地の探鳥会に参加してみるのはいかがでしょうか。ベテランの方も、経験・勘ではなくデータに基づいた観察実績がわかるので、お目当ての鳥に会いに行く際は是非ご活用ください。

**【用途3】：今度の探鳥会で過去数年間に観察された鳥は？**

用途1の発展系になります。エクセルのノウハウが少し必要ですが、ある探鳥会のデータ数年分をクロス集計すると、観察された鳥の年別一覧が出来ます。サンプルとして、「横山池・安濃ダム」の過去5年分データを加工してみました⇒別表1

○観察回数からの考察

• **観察回数5・4回の鳥は、まず会えるのでは？と期待が高まります。**

⇒お気に入りのミコアイサに会えるのが楽しみです！

• **観察回数3回の鳥は、会える可能性があります。**

• **観察回数2～1回の鳥は、会えたらラッキーです！**

○観察年からの考察

• **観察回数2回以下の鳥でも、前回の探鳥会で観察されていると会えそうな気がします！**

⇒去年初めて観察されたハジロカイツブリ、ミサゴには特に期待したいところです。

• **観察回数4回の鳥でも、前回観察されていないと少し不安になります。**

⇒オシドリさん、今年は会いたいです！

もちろん、これ以外にも色々な役立て方があると思います。データなんて難しそうと言わずに、一度検索してみてください。せっかくの機能なので使ってみましょう！

別表1 <横山池・安濃ダム探鳥会 観察実績>

NO	鳥種類	2014年	2015年	2017年	2018年		観察回数 (過去5年で)
		12月	12月	1月	1月	12月	
1	アオサギ	○	○	○	○	○	5
2	オオバン	○	○	○	○	○	5
3	カイツブリ	○	○	○	○	○	5
4	カルガモ	○	○	○	○	○	5
5	カワウ	○	○	○	○	○	5
6	コガモ	○	○	○	○	○	5
7	ジョウビタキ	○	○	○	○	○	5
8	ダイサギ	○	○	○	○	○	5
9	ハシボソガラス	○	○	○	○	○	5
10	ヒヨドリ	○	○	○	○	○	5
11	ホシハジロ	○	○	○	○	○	5
12	マガモ	○	○	○	○	○	5
13	ミコアイサ	○	○	○	○	○	5
14	メジロ	○	○	○	○	○	5
15	オシドリ	○	○	○	○		4
16	カワラヒワ	○	○	○		○	4
17	シロハラ	○	○		○	○	4
18	ツグミ	○	○	○		○	4
19	トビ	○	○		○	○	4
20	モズ	○		○	○	○	4
21	アオジ	○			○	○	3
22	エナガ	○		○	○		3
23	カシラダカ		○	○		○	3
24	カンムリカイツブリ		○	○		○	3
25	キンクロハジロ		○	○	○		3
26	コゲラ	○		○		○	3
27	ベニマシコ	○	○			○	3
28	ヤマガラ			○	○	○	3
29	ウグイス		○		○		2
30	オオタカ		○		○		2
31	カワセミ		○		○		2
32	シジュウカラ			○		○	2
33	スズメ			○	○		2
34	ハクセキレイ			○	○		2
35	ハシボソガラス		○		○		2
36	ムクドリ			○	○		2
37	ルリビタキ			○	○		2
38	アオバト				○		1
39	オカヨシガモ	○					1
40	オナガガモ				○		1
41	カケス				○		1
42	カワラバト			○			1
43	キセキレイ			○			1
44	クマタカ	○					1
45	コブハクチョウ		○				1
46	セグロセキレイ				○		1
47	タカ(不明)		○				1
48	ノスリ	○					1
49	ハイタカ	○					1
50	ハシビロガモ	○					1
51	ハジロカイツブリ					○	1
52	ヒドリガモ				○		1
53	ホオジロ				○		1
54	ミサゴ					○	1
55	ミミカイツブリ		○				1
56	ミヤマホオジロ		○				1
総計		29	31	31	36	28	



## シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化 — 連載第 19 回 キリアイ、ヘラシギ —

津市 今井 光昌

キリアイとヘラシギは嘴の形状に特徴のある小型シギです。キリアイは顔に比べて大きな嘴をしています。嘴の基部は太く、先端部分まで幅広く、先端は下方に曲がっています（図 1-2）。三重県では成鳥の渡来はごく稀ですが、幼鳥は毎年8月中旬から9月中旬にかけて数羽が渡来しています。ただ、2008年には松阪地区だけで数十羽

も渡来したことがある幼鳥も、2009年以降は10羽を超える群れを見ることはなくなりました。年々、渡来は減少傾向にあり、いつか途絶えるのではないかと危惧しているシギの一つです。キリアイは休耕田や埋立地などの淡水域も好みますが、過去の渡来場所を調べると河口干潟の方がやや多いです。



図1 キリアイ 幼鳥 2007.08.24



図2 キリアイ夏羽（右）とトウネン夏羽（左後方） 2015.05.23

ヘラシギは環境省の第4次レッドリストの絶滅危惧1A類に指定されている希少なシギです。シギ科で指定されているのはヘラシギとカラフトアオアシシギの2種です。ヘラシギの特徴はへら状の嘴です。へら状の嘴の先端が良く見えれば他種との識別は容易ですが、嘴の先端部が薄いため、横方向からはへらの形状が見えづらく、嘴だけで探すのはハードルが上がります（図3-4）。

三重県への渡来記録は2004年以前にもありますが、2005年から2008年にかけて4年連続で幼鳥が渡来し、その後5年間はなく、2014年に幼鳥1羽が渡来しました。成鳥の渡来記録はなく、幼鳥も秋の単独渡来ばかりで、複数での渡来はありません。ヘラシギは海岸の砂浜や砂質の強い干潟で記録されています。



図3 ヘラシギ 幼鳥 2008.09.14



図4 ヘラシギ 幼鳥 2014.09.07



図5 キリアイ 成鳥夏羽 2015.05.23



図6 キリアイ 成鳥夏羽後期 2008.08.13

### キリアイ成鳥 5月の夏羽と8月の夏羽後期

キリアイは白い眉斑が2つに分かれる特徴のある顔をしています。夏羽は軸斑が黒褐色で白い羽縁と赤褐色の羽縁があり、背にはV字形に見

える白線があります(図5)。図6は羽縁が擦り切れ全体に黒ずんできた8月の夏羽後期の羽衣です。



図7 キリアイ 成鳥夏羽 2015.05.23



図8 ハマシギ 成鳥夏羽 2011.05.19

### キリアイ成鳥夏羽とハマシギ成鳥夏羽

キリアイの類似種はハマシギと言う記述を見かけることがありますが、夏羽ではハマシギは腹部に大きな黒斑があり、翼帯も太いため、両種の違いは明瞭です(図7-8)。類似しているのは冬羽です。両種とも冬羽は上面が灰白色になる上に、ハマシギの腹部も冬羽では白くなるためです。両種が並ぶと識別は比較的容易です。キリアイはハマシギとトウネンの中間的な大きさで、ハマシギより体が一回り小さいからです。図9は中央がキリアイ幼鳥で、左後方はハマシギ、右はソリハマシギです。尚、キリアイの夏羽や幼鳥は羽模様が遠目にはハマシギよりヒバリシギに似て見えるかと思えます。



図9 キリアイ幼鳥(中央) 2011.08.31



図 10 キリアイ幼鳥 2009.08.19



図 11 キリアイ 第1回冬羽に換羽中 2011.11.04

### キリアイ 幼鳥と第1回冬羽

キリアイ幼鳥は夏羽の羽衣に似ていますが、背のV字形の白線が明瞭で、肩羽下段と雨覆の白い羽縁が太いです（図10）。

図11は幼羽から第1回冬羽に換羽中です。肩羽上段に灰白色の冬羽が出ています。



図 12 ヘラシギ幼鳥 2008.09.14



図 13 ヘラシギ幼鳥 2008.09.14

### ヘラシギ

ヘラシギはトウネンやミユビシギの群れといることが多いですが、メダイチドリの群れといたこともあります。ヘラシギは採餌の時にはヘラ状の嘴を砂や水中に入れ、左右に振りながら甲殻類や

ゴカイ類を捕らえます（図12-13）。嘴を左右に振らずトウネンと同じような採餌をしている時もありますが、小型シギの群れに嘴を左右に振るシギがいれば、ヘラシギではとよく見ることです。



図14 ヘラシギ幼鳥 2006.08.24



図15 ヘラシギ幼鳥 2006.09.24

ヘラシギ幼鳥は額・眉斑が白く、頭頂は褐色で黒褐色の縦斑があり、胸から下面は白く、側胸には黒褐色の斑があります。また、上面の各羽に黒

斑があり、白い羽縁があります(図14)。飛翔時の翼下面は白く、上面に細い白帯がでます(図15)。

ヘラシギ幼鳥とトウネン幼鳥

図16は手前がトウネンで後方がヘラシギです。ヘラシギはトウネンとほぼ同じ大きさですが、ヘラシギ幼鳥の上面は軸斑と羽縁のコントラストがトウネン幼鳥より強く、顔の白味が強いです。(図16)



図16 ヘラシギ幼鳥とトウネン幼鳥 2006.09.24

ヘラシギ幼鳥とミユビシギ幼鳥

嘴の形状は違いますが、ヘラシギ幼鳥とミユビシギ幼鳥は羽模様がよく似ています(図17-18)。ヘラシギはミユビシギより体が小さいことや、ミユビシギの翼角は黒いがヘラシギの翼角は黒くな

いこと、ヘラシギ特有の嘴を左右に振る採餌行動などによって識別できます。尚、ミユビシギの黒い翼角は肩羽がかぶさって見えないこともあります。



図17 ヘラシギ幼鳥 2008.09.14



図18 ミユビシギ幼鳥 2010.09.07

## 最後に

2015年以降、三重県への渡来記録がないヘラシギですが、毎年9月になると県内外からヘラシギを探しにバーダーが津市の海岸や河口を訪れています。絶滅の危機に瀕しているめったに見られないシギだからです。総個体数が世界中で数百とも言われる希少な種であるヘラシギが、津市の海辺に訪れる日があるかもしれません。図19は左がヘラシギ幼鳥で右後方はミユビシギ成鳥冬羽です。



図19 ヘラシギとミユビシギ 2007.09.18

### 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、 探鳥会中止のお知らせ

2020年3月の探鳥会はすべて、中止としました。4月以降の探鳥会については新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を見て、判断します。当会ホームページ、探鳥会リーダー、あるいは事務局：090-1566-6010に開催の有無をお問い合わせください。  
(代表 平井正志)

### 事務局だより

活動の記録 (2019年11月～2020年1月)

2019年

- 11 / 3 国土交通省「川と海のクリーン大作戦」五主海岸の清掃活動に参加
- 11 / 会報誌「しろちどり第102号」編集作業
- 11 / 19～20 鈴鹿川河口 三田町埋立地の調査
- 12 / 1 第2回理事会 (県立総合博物館)
- 12 / 7 「三重の自然と希少生物を守る会」主催の講演会に参加
- 12 / 8 会報誌「しろちどり第102号」発行・発送作業
- 12 / 18 「鳥羽市太陽光発電所プロジェクト事業計画」説明会に出席
- 12 / 22 来年度の活動について打ち合わせ
- 12 / 23 第1回ミヤコドリ一斉調査
- 12 / 来年度の探鳥会について計画 (各地区)

2020年

- 1 / 12 県委託「令和元年度ガンカモ類及びカワウ一斉調査」実施
- 1 / 18 松阪市立松ヶ崎小学校で野鳥観察会 (松阪地区)
- 1 / 20 第2回ミヤコドリ一斉調査

## 海辺の町のツバメたち - 伊勢・二見町茶屋の通り -



玉城町 西村 泉

2019年7月のある日、中日新聞のホームニュースに、二見町の商店で今年はツバメの巣が過去最高の「12」を記録したとの記事が載っていました。興味がわいたので、さっそく見に行ってきました。

場所は、夫婦岩に近い商店街の土産物屋さん「五十鈴勢吾庵」。切妻屋根の日本家屋、建物の周りでツバメが飛んでいるのが遠くからでもよくわかります。けれども不思議なことに軒先にはひとつも巣が見当たりません。ところが一步店内に入るとそこはツバメのお宿、思わず「すごーい！」と口走ってしまいました。店内にはいくつも巣があり、その下にフン受け用の大きなザルが設置し

てありました。それぞれの巣には、可愛いヒナたちが元気な声で餌をねだっています。親ツバメは、店内に客がいても見事に人を避けて巣に戻ります。伊勢のおほらい町のツバメも人慣れしていますが、ここのツバメはそれ以上に人とツバメが近いのです。

お店の人に伺うと、17年前から巣をつくるようになり、最初は人が近づくと警戒してすぐ飛んでいったそうです。今では毎年ツバメが帰ってきてヒナを見るのが楽しみとおっしゃっていました。ちなみに初めての巣は、神棚のしめ縄に作ったとのこと、おめでたい話です。



この写真に巣が4個とフン避けのザルが5個写っています。分かりますか？

この店では、二見町特産品「塩ようかん」や塩ソフトクリームを販売しています。とても美味しいので、おすすめです。他にこの周辺で巣がある店は、4～5店ありましたが、いずれも軒先ではなく店内でした。おそらくカラスに襲われるからでしょう。どの店も商品の上にフン除け用の透明ビニールをかけ、親鳥の止まり木のリースを天井からぶら下げ、さらにツバメの出入りのため格子戸のガラスを1枚だけ外している等々いろいろ世話している様子が伺えました。

なかでも印象深かったのは「まつしん旅館」。玄関が開けっばなしのロビーには2匹の中型犬シェルティが寝そべっていて、ツバメが頻繁に出入りしても知らん顔です。そとからでは見えませんが、どうやらイヌの近くに巣があるらしく、絨毯の上にフン受けの段ボールが敷かれてあります。

お店の人によると、イヌはツバメには吠えないかわり、ネコが通るとよく吠えると言っていました。看板犬のシェルティは、ツバメの用心棒も担っているようでした。

毎年、ツバメは東南アジアから日本へ子育てをしに帰ってきます。他の野鳥とは違い、巣作りから子育て・巣立ちまでのすべてのプロセスを人の目の前で見せてくれます。それだけに人がどのようにツバメに関わるかで、また繁殖状況が変わってきます。ここ数年ツバメと人との関係がだんだん薄れていくようで寂しさを感じていましたが、今回ツバメが多くの人々から大事にされていることを知り嬉しくなりました。

毎日ツバメの世話をされている皆様 ツバメに代わってお礼申し上げます。感謝!!

この原稿は2019年7月に執筆したものです。

# 野鳥記録 (2019年10月21日から2020年01月29日までに報告があったもの)



野鳥の種類名	個体数	観察日	観察場所 (三重県)	雄/雌/などの区別	記録報告者名	脚注
ノゴマ	1	2019年10月22日	菰野町菰野 三滝川	雄	三曾田明	1
ムギマキ	1	2019年10月26日	松阪市飯南町相津峠	雌	西村 四郎	2
マミチャジナイ	1	2019年10月27日	松阪市飯高町下滝野	雌	西村 四郎	3
ツグミ	1	2019年11月10日	四日市市垂坂公園	初認	今西 純一	4
シロハラ	2	2019年11月10日	四日市市垂坂公園	初認	今西 純一	5
ハイイロチュウビ	2	2019年11月 7日	木曾岬干拓地	雄、雌	笹間 俊秋	6
アカアシカツオドリ	1	2019年11月16日	鈴鹿市	幼鳥	今西 純一	7
オオタカ	1	2019年11月16日	鈴鹿市	幼鳥	今西 純一	8
クロガモ	5	2019年11月10日	松阪市曾原町 沖洋上		前田 聰	9
オナガガモ	1	2019年11月22日	安濃川河口	雌	三曾田明	10
スズガモ	1	2019年11月23日	鈴鹿川派川河口	雌	三曾田明	11
マガン	1	2019年11月20日	四日市市鈴鹿派川	成鳥	山神 勝治	12
白変のスズガモ	1	2019年11月20日	四日市市楠町		山神 勝治	13
アカアシカツオドリ	1	2019年11月20日	四日市市楠町	幼鳥	山神 勝治	14
オニアジサシ	1	2019年11月16日	木曾岬干拓地		笹間 俊秋	15
マガン	1	2019年11月16日	木曾岬干拓地		笹間 俊秋	16
アビ	1	2019年11月29日	四日市市鈴鹿川河口		笹間 俊秋	17
アメリカコガモ	1	2019年11月26日	桑名市員弁川	雄	山神 勝治	18
トモエガモ	1	2019年12月 3日	桑名市溜め池	雄	山神 勝治	19
チョウセンオオタカ	1	2019年12月 1日	四日市市山村ダム	不明	山神 勝治	20
ホオジロガモ	2	2019年12月 4日	津市安濃町戸島箕内池	雌 (雄幼鳥の可能性もあり)	平井 正志	21
アカアシカツオドリ	1	2019年12月12日	四日市市鈴鹿川沖合	幼鳥	山神 勝治	22
アビ	1	2019年12月12日	鈴鹿市	不明	山神 勝治	23
オオハム	1	2019年12月12日	鈴鹿市	幼鳥	山神 勝治	24
オシドリ	4	2019年12月18日	安濃ダム	雄3、雌1	唐津 敏明	25
アメリカヒドリ	2	2019年12月 6日	明和町川尻	雄1、雌1	西村 四郎	26
アビ	1	2019年12月20日	伊勢市東大淀町沖	成鳥	西村 四郎	27
ヒメウ	1	2019年12月20日	伊勢市有滝町沖		西村 四郎	28
シノリガモ	1	2020年 1月10日	津市白塚漁港	雄・1年目冬	山神 勝治	29
ヒメウ	1	2020年 1月11日	四日市市鈴鹿派川	不明	山神 勝治	30
シロハラ	1	2020年 1月 4日	垂坂公園		今西 純一	31
ホシハジロ	1	2020年 1月19日	千代崎漁港	雄	今西 純一	32
カンムリカイツブリ	127	2020年 1月12日	四日市市石原産業沖		辻 秀之	33
ハヤブサ	1	2020年 1月12日	四日市市北勢中央公園	幼鳥	三曾田明	34

## 脚注

1. 双眼鏡でよく見ると喉が赤い。ツグミとは違って駆け足で移動する様子を観察できました。
2. カラスザンショウの実をホバリングしながらついばみにきていました。行ったり来たり動きが速いです。白い眉斑がないので雌と思われます。
3. 他にも数羽いた。
4. 木の上で黒い実を食べているようでした。垂坂公園では例年より早めの確認となりました。



5. 昨年（11/11）とほぼ同じ日に確認しました。
6. チュウヒのねぐら入りを観察していると、全身真っ白のハイイロチュウヒ雄が飛んでいた。  
また、鍋田からねぐらに帰って来る雌も確認しました。
7. テトラポットのウミネコを見ていたら一羽だけ混じっていました。図鑑によると白色型の幼鳥は足が黄色で頭が白みがかっているそうですが、どちらも該当しないため褐色型なのかもしれません。
8. 何か食べていましたが、食べ終わりに近く獲物は不明です。喉の部分がかなり膨らんでいました。
9. スズガモの大群から少し離れた海上に、クロガモの特徴である、体全体が黒色、嘴が黄色の5羽のグループを発見、今季初認であったので投稿しました。
10. 白化個体（白変個体）です。一羽だけ明らかに全体が白っぽい個体でした。
11. なんと、安濃川探鳥会でオナガガモの白化個体を確認した帰りに、またしても白化個体がありました。
12. 毎年田んぼでは見ていたが、今年は見られず残念に思っていた矢先河口で見られてラッキーでした。
13. 珍しい鳥を見ることが出来ました。
14. 海岸より 200m 程の沖合で、遠くて鮮明な画像が撮れなかったのが残念です。
15. 木曾岬干拓地でのチュウヒ調査中に調査員が河口に飛翔しているアジサシを撮影して確認。  
代理投稿のため写真は無し。
16. 木曾岬干拓地でチュウヒ調査中に調査員がカモと一緒に飛ぶ大きめの鳥を撮影しマガンと確認した。代理投稿のため写真は無し。
17. 鈴鹿川の河口にカワウとは違った鳥がいたので、写真を撮ったらアビでした。
18. 2年連続で飛来しました。
19. やっぱり綺麗な鳥ですね。
20. 今年1月に員弁川で幼鳥を見ており、この近辺に冬になるとやって来るのかも？胸から腹部の下面が白っぽく縦斑があること。
21. 内陸の池ではめずらしい。それも2羽も。
22. 11/20に観察した個体と同一？伊勢湾内で活動しているのか？
23. 最初遠かったけれどだんだん近づいて来てくれてラッキーだった。真っ直ぐで尖った嘴、上面の整然と並んだ羽縁。
24. アビとオオハムが一度に見られた。
25. 警戒心が非常に強く対岸の斜面を、昇る様子が、確認出来ました。
26. ヒドリガモの群れの中にいました。
27. 一度潜るとなかなか出てきません。遠くて、写真を撮らなければ判定できないですね。上に反った嘴、目先の白、上面の白点。
28. 明和町～伊勢市の沖や、漁港の中でも見かけました。同一個体と思われます。割と警戒心が薄い。
29. 低気圧の前線の影響で強風が吹いていたので避難してきたのかな？
30. この辺の海では、久しぶりの出会いでした。  
全身が黒く、顔に黄色部が無い。
31. 5年連続飛来しているシロハラです。左目の下に白いマークが3つあるので識別可能です。1/4に初認、1/20に撮影しました。  
レンズの最短撮影距離（0.98m）ギリギリからの撮影です。
32. 普通種ですが水が綺麗で潜る様子が間近で観察できたので報告します。
33. 100羽を超える群れは観察経験がないので、報告しておきます。
34. 北勢中央公園では初めてハヤブサを見ました。たくさんいたツグミを狙って急降下してきした。2度ほどトライしましたが、狩りは失してそのまま去って行きました。



アカアシカツオドリ：山神 勝治



ムギマキ：西村 四郎

アカアシカツオドリ：今西 純一



マガン：山神 勝治



白変のスズガモ：山神 勝治

トモエガモ：山神 勝治



アビ：西村 四郎



シノリガモ：山神 勝治

ノゴマ：三曾田 明





## 理事会報告

2019年12月1日(日)

三重県総合博物館会議室 出席：11名

### 【協議事項】

#### ●初心者向け探鳥会

- ・入会案内の作成
- ・探鳥会案内の部数増加
- ・広報担当

桑名：近藤 四日市：安藤 津：平井  
 松阪：西村四郎 伊勢：西村 泉

#### ●会報誌の部分公開

#### ●四日市四郷風致地区問題

風致地区改変 パブリックコメントに会として意見

#### ●鳥羽太陽光発電計画問題 説明会に出席する

#### ●ガンカモ調査 調査地・担当者の検討

#### ●ミヤコドリ調査 3回(12月、1月、2月)

#### ●フクロウ巣箱架け 担当・場所は非公開とする

### 【報告事項】

#### ●理事グループメールの変更

#### ●全国連携団体総会

- ・会長の交代

名誉会長 柳生博氏 会長 上田恵介氏(財団)

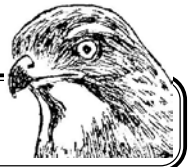
- ・探鳥会フォーラムの中止(財団)

- ・太陽光発電 アセスの対象となる 3万kw以上 = おおよそ100ha

- ・洋上風力の計画が盛ん(青森、秋田、千葉、長崎)

- ・センシティビティマップを作成している(財団)

- ・支部の解散(函館、二本松、小清水)



## 探鳥会報告(2019年10月～2020年1月)

### ●木曾岬干拓地探鳥会探鳥会

2019年10月27日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者12名(会員11名)

カルガモ(30)、カイツブリ(2)、カワウ(80)、アオサギ(10)、ダイサギ(15)、コサギ(2)、オオバン(3)、アマツバメ(5)、イソシギ(1)、ウズラシギ(2)、ミサゴ(6)、トビ(6)、チュウヒ(3)、オオタカ(1)、ノスリ(1)、カワセミ(3)、アリスイ(1)、チョウゲンボウ(1)、モズ(6)、ハシボソガラス(70)、ハシブトガラス(15)、ヒバリ(6)、ツバメ(7)、ヒヨドリ(20)、メジロ(4)、ムクドリ(10)、ジョウビタキ(7)、ノビタキ(3)、イソヒヨドリ(1)、スズメ(100)、ハクセキレイ(30)、セグロセキレイ(2)、タヒバリ(16)、カワラヒワ(20)、ホオジロ(15)、ドバト(40) 計36種

ハヤブサとコチョウゲンボウを除く、普段見られる猛禽類のほとんどを観察できました。チュウヒも何度も飛んでくれました。今日はアマツバメも比較的低いところを巡回してくれました。木曾岬干拓地の中ではアリスイが羽を休めていました。

### ●中村川探鳥会

2019年11月10日(日) 9:30～11:30

松阪市嬉野一志町 中村川中流域

吉崎幸一 小野新子 参加者19名(会員17名)

キジ、カルガモ、キジバト、カワウ、アオアシシギ、イソシギ、トビ、カワセミ、チョウゲンボウ、モズ、ハシボソガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、ドバト 計24種

雲一つない快晴での開催となりました。始まってまもなく、尾羽の黒いバンドがはっきり見えるくらいの上空をチョウゲンボウが数回ゆっくり巡回する姿を全員で観察でき、幸先の良さを感じました。河原ではジョウビタキ、アオジといった冬の鳥も見られ、盛んに鳴き声の聞かれたモズも草の先端に止まっていました。ヒヨドリが熟した柿を食べている姿や、川ではカワウが魚を啜っている姿を観察しました。対岸ではカワセミが水面近くの枝に止まり、何度も川に飛び込みその度に体の向きを変え緑色と鮮やかなスカイブルーの背面を皆で観察することができました。そのほかウグイスの笹鳴きも聞かれ、初冬の季節が感じられた探鳥会となりました。

### ●三滝川かんさつ会

2019年11月16日(土) 9:30～11:55

三重郡菰野町 三滝川河川敷

矢田栄史 宮本英子 参加者12名(会員9名)

キジバト、イカルチドリ、カワセミ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオジロ、アオジ、オオジュリン 計22種

青空、ほぼ無風でした。川幅はあまりないですが、対岸のヨシ原にいるベニマシコ、そしてこの時期に初めて見たオオジュリン2羽の姿も。後半、目の前のヤナギの大木にエナガの群れ17羽ほど、シジュウカラ、コゲラ、メジロもいて、じっくり10分以上全員で観察しました。群れが去ったあと、この時期の混群の説明をしました。

### ●海蔵川で鳥見 ing!(バードウォッチング) その3

2019年11月23日(土・祝) 9:45～11:30

四日市市西坂部町 海蔵川沿い

川瀬裕之 参加者5名(会員5名)

カルガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、ミサゴ、オオタカ、カワセミ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、ジョウビタキ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ 計21種

海蔵川のバードウォッチングで唯一の休日開催ですが、ちょっと人数がさみしかったです。前日の天気が嘘のように気持ち良い青空の下、この時期にしては大変気温が高い中スタートしました。太陽に照らされた眩しい川面にはカイツブリの甲高い鳴き声が響いていましたが、カルガモが数羽浮かんでいるだけで、シベリアからの使者たちの姿はありませんでした。こういう日はタカが飛びそうなので上空を注視していると、出ました!久しぶりのオオタカです!割合近距離だったので羽模様もはっきり観察出来ました。足元ではホオジロの可愛い声が、また対岸では枝先に止まったモズの高鳴きが聞こえ、本格的な冬が訪れる前に気持ちよく過ごす事が出来ました。また、偶然通りかかった地元の方にスコープでカワセミを見ていただいたら、あまりの綺麗さに感激してました!これを機に野鳥に興味をもってもらえたら幸いです。

### ●安濃川河口探鳥会

2019年11月23日(土・祝) 13:00～14:20

津市高洲町 安濃川河口

落合 修 平井正志 参加者8名(会員7名)

ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ハジロカイツブリ、カワウ、ダイゼン、ミヤコドリ、ミユビシギ、ハマシギ、ユリカモメ、ウミネコ、セグロカモメ、ミサゴ、ハシボソガラス、スズメ、ハクセキレイ、ホオジロ、計21種

参加者は少なかったですが、ミヤコドリは10羽程観察できました。他に、謎のカモや、オナガガモの白化個体を観察できました。

### ●木曾岬干拓地探鳥会探鳥会

2019年11月24日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者23名(会員18名)

キジ(1)、オカヨシガモ(2)、マガモ(7)、カルガモ(5)、ハシビロガモ(8)、コガモ(250)、ホシハジロ(58)、キンクロハジロ(100)、スズガモ(21)、カイツブリ(2)、カンムリカイツブリ(5)、キジバト(2)、カワウ(250)、アオサギ(6)、ダイサギ(1)、オオバン(36)、タゲリ(11)、ケリ(3)、クサシギ(1)、イソシギ(1)、ミサゴ(6)、トビ(5)、チュウヒ(2)、ノスリ(1)、チョウゲンボウ(1)、モズ(10)、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(10)、ヒバリ(1)、ヒヨドリ(15)、ウグイス(1)、メジロ(2)、ムクドリ(100)、シロハラ(1)、ツグミ(4)、ジョウビタキ(5)、イソヒヨドリ(1)、スズメ(80)、ハクセキレイ(8)、セグロセキレイ(3)、タヒバリ(4)、カワラヒワ(6)、ホオジロ(5)、アオジ(4)、ドバト(60) 計45種

11月末の探鳥会にしては暖かく穏やかな一日でした。カモ類やタゲリ・タヒバリなどの冬鳥がたくさん観察できました。



カケス

### ●神路ダム探鳥会

2019年11月24日(日) 9:30～11:30

志摩市磯部町恵利原 神路ダム

西村 泉 濱屋勝則 参加者10名(会員9名)

オシドリ、オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、オオバン、トビ、カワセミ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、セグロセキレイ、カワラヒワ、アオジ 計27種

神路ダムは、志摩市の水がめになっているため人の出入りが規制されています。今回は特別に許可をもらい探鳥会を実施することができました。当日は晩秋の穏やかな日、暖かく風のない絶好の鳥見日和となりました。たくさんの小鳥たちの声に迎えられ、カラ類・ルリビタキ・ジョウビタキの声が聞かれました。ダム湖ではキンクロハジロやオオバン等が浮んでいて、お目当てのオシドリは少し遠い向こう岸に20～30羽程いました。色鮮やかなオスのオシドリの姿に参加者から感嘆の声が上がりました。少人数でゆっくり観察ができ、紅葉も楽しめた探鳥会でした。

### ●員弁川探鳥会

2019年12月8日(日) 9:00～11:30

いなべ市員弁町 員弁川周辺

近藤義孝 笹間俊秋 参加者8名(会員6名)

コガモ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、ケリ、クサシギ、トビ、チョウゲンボウ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、ドバト 計25種

水田の中、河岸段丘の林、堤防上の灌木などで、一般的な冬鳥を観察できた。毎年姿を見せてくれるチョウゲンボウにも会うことができた。

### ●身近な冬鳥を観察しよう(博物館周辺の溜池)

2019年12月8日(日) 9:30～11:30

津市一身田上津部田 三重県総合博物館周辺の溜池

共催団体/三重県総合博物館・三重県環境学習情報センター

平井正志 木村京子 参加者19名(会員2名)

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、カワウ、ダイサギ、ハシボソガラス、ヒヨドリ、メジロ、ムクドリ、ジョウビタキ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ 計19種

参加者には初心者が多かった。博物館内でカモ類の標本などを見て、鳥の体を説明。その後、周辺のおおさん池・兵丹池などを見てまわった。カモ類が多かった。風もなくおだやかで、暖かであった。昨年まであった落葉樹の林が伐採され、住宅地になっていて残念であった。途中、何者かに捕食された鳥の翼を拾った。調べてみると初列風切の数枚が残っており、コガモであった。

### ●ベルファーム探鳥会

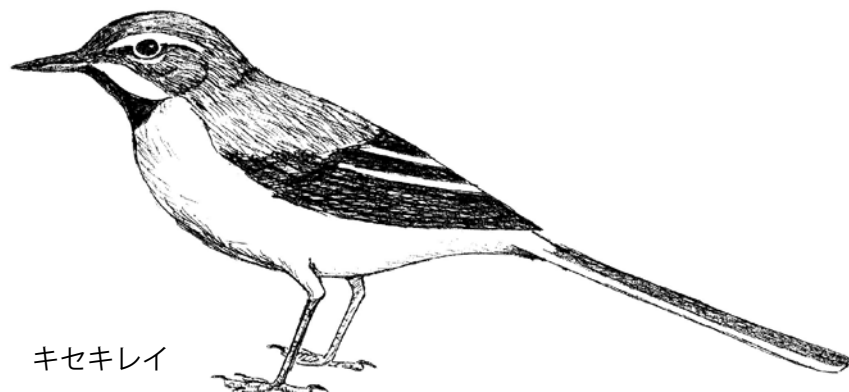
2019年12月8日(日) 9:30～11:30

松阪市伊勢寺町 松阪市農業公園ベルファーム

加藤恭子 中村洋子 参加者36名(会員24名)

ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ダイサギ、オオバン、トビ、オオタカ、コゲラ、チョウゲンボウ、ハシボソガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、シメ、イカル、ホオジロ、アオジ 計34種

風が強かったが、よく晴れた日でした。池にはいろんなカモ類がたくさんいて、子供たちや初めての参加者には、望遠鏡ではっきり見ることができ、大変好評でした。終了後、会員外の参加者4家族のうち3名が、お試し会員に申し込みしてくださいました。



キセキレイ

### ●横山池・安濃ダム探鳥会

2019年12月15日(日) 10:00～11:45

津市芸濃町 横山池・安濃ダム

落合 修 奥山正次 参加者12名(会員11名)

オシドリ、オカヨシガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、オオバン、トビ、カケス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、メジロ、ツグミ、ハクセキレイ、カワラヒワ 計21種

風が強く寒い日でした。横山池では、オスのミコアイサ1羽観察できました。安濃ダムでは、今年はオシドリを観察することができ、オスが11羽メスが6羽いました。

### ●磯部川水系探鳥会

2019年12月15日(日) 9:30～11:30

志摩市磯部町穴川 穴川～迫間

濱屋勝則 高木正文 参加者12名(会員9名)

オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、ホシハジロ、キジバト、カワウ、オオバン、ケリ、イソシギ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、チョウゲンボウ、ハシボソガラス、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、タヒバリ、ホオジロ、計24種

朝から強い風の吹く日でしたが、たくさんの参加者の皆さんと多くの野鳥を見て、観察する事が出来ました。探鳥会の中では、チョウゲンボウのホバリングを皆で必死で見られた場面は、印象的でもありました。

### ●木曾岬干拓地探鳥会探鳥会

2019年12月22日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者16名(会員9名)

オカヨシガモ(17)、カルガモ(53)、ハシビロガモ(25)、コガモ(35)、ホシハジロ(4)、キンクロハジロ(10)、スズガモ(7)、ミコアイサ(2)、カイツブリ(3)、カンムリカイツブリ(2)、キジバト(16)、カワウ(500)、アオサギ(5)、ダイサギ(2)、オオバン(10)、タゲリ(7)、イソシギ(1)、ミサゴ(6)、トビ(2)、チュウウヒ(4)、ハイイロチュウウヒ(1)、ノスリ(2)、チョウゲンボウ(1)、コチョウゲンボウ(2)、モズ(1)、ハシボソガラス(10)、ハシブトガラス(10)、ヒヨドリ(5)、メジロ(30)、ムクドリ(300)、ツグミ(10)、ジョウビタキ(2)、スズメ(17)、ハクセキレイ(6)、セグロセキレイ(2)、タヒバリ(100)、カワラヒワ(43)、

ホオジロ(2)、アオジ(3)、ドバト(158) 計40種

コチョウゲンボウやハイイロチュウウヒも観察できました。それほど寒くなく、日差しは有りませんでしたでしたが冬にしては穏やかな探鳥会でした。

### ●上野森林公園探鳥会

2020年1月12日(日) 9:30～11:30

伊賀市下友生松ヶ谷1 三重県上野森林公園

共催団体/上野森林公園・三重県環境学習情報センター

前澤昭彦 南一朗 参加者26名(会員6名)

オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カイツブリ、カワウ、オオバン、ケリ、トビ、ハシボソガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、カワラヒワ、ホオジロ 計24種

四九新池にフロートソーラーパネル設置されている。公園側から見るとパネルは奥の方にあるため、カモ類はこれまでよりも手前に集まってきており、近くで観察できるようになった。皮肉な事だがソーラーパネルが観察に功を奏した形となっている。鳥合わせの後、カルガモの風切羽を見てもらって、鳥の体のつくりについて説明した。

### ●肱江川探鳥会

2020年1月19日(日) 10:00～12:20

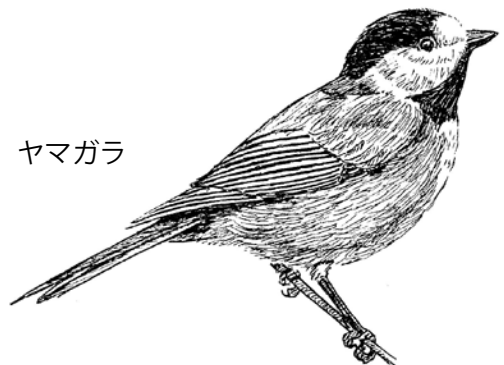
桑名市多度町猪飼 肱江川周辺

共催団体/両猪飼の環境を守る会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者16名(会員9名)

カワウ、アオサギ、クサシギ、トビ、ノスリ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ、オオジュリン、ドバト 計23種

10時開始で気温も高くなり、風もなく観察日和でした。残念ながら、出現した鳥類の数が少なかったです。カモ類は1種類も観察できませんでしたが、ノスリなど23種が観察できました。



ヤマガラ

## ●木曾岬干拓地探鳥会探鳥会

2020年1月26日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曾岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者15名(会員10名)

オカヨシガモ(7)、マガモ(15)、カルガモ(10)、ハシビロガモ(6)、コガモ(100)、ホシハジロ(7)、キンクロハジロ(9)、スズガモ(7)、ウミアイサ(1)、カイツブリ(1)、カンムリカイツブリ(1)、キジバト(1)、カワウ(10)、アオサギ(5)、ダイサギ(1)、オオバン(8)、タゲリ(25)、ケリ(1)、イカルチドリ(1)、イソシギ(3)、ユリカモメ(2)、ミサゴ(8)、トビ(6)、チュウヒ(3)、ハイイロチュウヒ(2)、オオタカ(2)、モズ(2)、ハシボソガラス(15)、ハシブトガラス(10)、シジュウカラ(1)、ヒバリ(5)、ヒヨドリ(13)、ウグイス(1)、メジロ(1)、ムクドリ(100)、シロハラ(1)、ツグミ(30)、スズメ(100)、ハクセキレイ(20)、セグロセキレイ(2)、タヒバリ(7)、カワラヒワ(20)、ホオジロ(15)、アオジ(3)、ドバト(120) 計45種

前日の雨の予想に反して、曇り空の探鳥会になりました。ウミアイサが観察できたり、チュウヒ・オオタカなども観察でき、参加者は喜んで帰りました。

## ●木曾三川探鳥会

2020年1月28日(火) 9:00～12:00

桑名市・海津市・愛西市 揖斐川・長良川・木曾川

共催団体/桑名市

笹間俊秋 近藤義孝 参加者6名(会員4名)

オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ウミアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、オオバン、タゲリ、シロチドリ、ハマシギ、セグロカモメ、ミサゴ、チュウヒ、ノスリ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロ、ムクドリ、カワガラス、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、ドバト 計48種

朝まで雨が降り道路も濡れていましたが、薄日が漏れる天候で無事開催することができました。揖斐川の葦原では2羽のチュウヒが飛び、背割りでもチュウヒを見ることができました。ドッグランの駐車場では、シロチドリ10羽、ハマシギ20羽ほどが休んでいて、車が近くを通過しても逃げることなく、じっくり観察出来ました。



イカル

## 編集後記

世間では新型コロナウイルスが騒がれており、どのニュース番組でもトップで扱われている。確かに最新情報を見守りつつも、自衛も必要な状況のようだ。このウイルスは致死率は低いようだが、ヒトからヒトへ感染することが大流行の要因になっている。

一方、2006年には鳥インフルエンザ(H5N2型)ウイルスがヒトに感染したことが報道され、このときも世間が騒いでいた。その後も毎年のように野鳥では鳥インフルエンザ(H5N2型に限らない)が死骸や糞などから確認されており、家禽への感染(国内では2018年1月が最後で、これ以降はない)も時折報道されている。

これまでの例を見ると、鳥インフルエンザの致死率は4割を超えるが、今のところヒトからヒトへの感染能力はないらしい。もし、これがその能力をもつウイルスに変異したら…考えるだけでも恐ろしい。(A.M.)

しろちどり 103号

2020年3月15日発行

題字:濱田稔

表紙絵:田中豊成

カット:田中豊成

編集:平井正志・笹間俊秋・三曾田明

発行所:日本野鳥の会三重

平井正志 方

〒514-2325 津市安濃町田端上野 910-49

ホームページ <http://miebird.org/>

印刷:株式会社プリントパック

〒617-0003 京都府向日市